

えいらい

No.33

平成 29 年 10 月発行
発行元／一般財団法人永頼会 松山市民病院



〒790-0067 愛媛県松山市大手町 2 丁目 6-5 TEL / 089-943-1151 FAX / 089-947-0026
発行責任者／院長 山本祐司 編集／松山市民病院広報委員会

時代のニーズと医療



副院長 重見 律子

昨年度、医師国家試験合格者の34.5%が女性でした。当院でもこの数年、初期研修医・後期研修医共に女性医師が増加しています。女性医師が働きやすい環境を整えるように、との院長の指示で、私は一昨年から副医局長を命じられ活動を開始しました。医局規約の見直しと女性医師の仮眠室・更衣室の整備—女性医師が妊娠中や体調が悪い時にも、休憩をとりながら勤務が続けられるように、との思いです。

もちろんこれは医師に限ったことではありません。もともと病院は、女性の多い職場です。医療職はやりがいがある一方で身体的にも精神的にも過酷です。妊娠・出産する女性を職場や社会で見守り、子育て中も支援することが、長く仕事を続け、キャリアを積むことにつながります。

当院では、5年前から院内保育所『えいらいキッズ』をつくり、育児中の勤務者のニーズに伝えていました。しかし、小さい子どもはすぐに熱が出たり調子が悪くなるものです。急な病気の際に母親に代わって保育を行い、安心して勤務できるように、病児保育を利用する人が増えていました。

そのため今年11月から、『えいらいキッズ』の拡大と共に、病児保育『アイビー』を新たに加えた『リエール保育園』が開園されることになりました。小児科が全面的に協力し、当院ならではの保育、病児保育を提供したいと考えております。

さて、私が医師になって30年の間に、小児医療とそれを取り巻く環境は想像以上に変わりました。1,000グラム以下で生まれたベビーの生存率は飛躍的に上昇し、水痘やインフルエンザに対

する抗ウイルス剤や新たな抗菌薬は、感染症の治療を変えています。何より、肺炎球菌ワクチン、ロタウイルスワクチンなど各種ワクチンによって、感染症の患者数は大幅に減少しました。

総務省のデータによると、15歳未満の小児の人口は1985年に2,604万人でしたが、2016年には1,605万人と、この30年で約1,000万人減少しています。少子超高齢化の厳しい現実です。小児人口の減少に加え、重症感染症の減少から、小児の入院患者数は全国的に減っています。一方で、時間外患者は相変わらず多く、医療機器の進歩により小児の在宅患者は増え、慢性疾患を持ちながら成人になっている人の数も増えていきます。

さらに今問題になっているのは、発達障害を持つ小児の増加です。自閉症スペクトラム障害、注意欠如多動症(ADHD)と診断される小児の割合は急増しており、内服治療を行う患者も増加、療育機関が不足している状況にあります。当科に受診される発達障害の患者への療育や指導が十分でないことを強く感じていたところ、当院リハビリ部門が協力してくださり、小児発達リハビリが行われるようになりました。今年5月から開始し、徐々に対象者を増やしています。時代のニーズに沿った試みであり、さらに充実させたいと思います。

社会は確実に変化し続け、職場や医療に要求されることも常に変化します。社会のニーズを知り、医療へのビジョンを持ち、時代にあったミッションを考え、柔軟な発想でリノベーションを行う、この姿勢を医療者として忘れないようにしたいものです。